

パネルディスカッション 「新世紀のロータリー奉仕活動について」

コーディネーター/ アドバイザー/ パネラー/ 司会	南園義一 宮崎茂和 仁田一也 土屋直祐 土肥浩右 正木康史	パストガバナー パストガバナー パストガバナー パストガバナー 直前ガバナー 岩国西RC
---	--	---

司会：

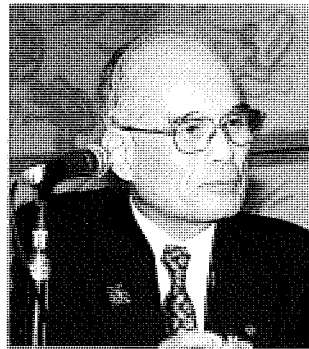
ただいまより、「新世紀のロータリー奉仕活動について」と題しまして、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

本日のコーディネーターは、地区研修リーダーの南園義一パストガバナー。

アドバイザーは、先ほどご講演いただきました、宮崎茂和パストガバナー。

パネラーの皆さまは、仁田一也パストガバナー、土屋直裕パストガバナー、土肥浩右直前ガバナーです。皆さま、よろしくお願いいたします。

南園コーディネーター：



それでは、パネルディスカッションを始めさせていただきます。タイトルは、「新世紀のロータリー活動について」というテーマでございまして、先ほどの宮崎パストガバナーのお話に引き続きまして、新しいパネリストで討論を展開したいと思っております。

私も8月に、宮崎パストガバナーの2650地区に、財団コーディネーターとして招待されまして、ロータリー財団についてお話してまいりましたが、2650地区は6,000名いらっしゃいます。しかも、実践活動というものが非常に良く行われているということに、エネルギーを大変感じました。

ですから、今日の話も、もし皆さんが感銘を受けられたとすれば、やはり実践と経験から来る感銘であろうと思います。そういう意味でも、ただ単にここでロータリーの議論をするということではなくて、その中に、皆さんがロータリアンとして、あるいはクラブとして、これからどういう活動をすればいいかという教訓を汲み取っていただくことが大きな目的でございます。

新しい世紀と申しまして、だいぶ時代が変わってま

いりました。先ほどのお話にもございましたが、テロによるいろいろな世界的な不安定な状況も続いております。ある新聞には、いよいよ寛容と非寛容の戦いが始まったと書いてありました。元来ロータリーは、善意と寛容という考え方が一番基本にあります。この善意と寛容というものが、いろいろな意味で、世界の紛争や平和に対して、これから大きな意味合いを持つということを、大変重要視してもいいと思っております。

例えば国際問題研究のためのロータリーセンターなど、今一生懸命立ち上がらせていますが、このような、一見無力に見えても、本当に根本にある考え方をしっかりと持って、宗教や、いろいろな意味で、文化、文明というものをある程度超越した、一つの大きな流れをつくり上げていけないものだろうかと考えております。

ハンチントンという人が、文明の衝突という本をお書きになりました。数年前、私も読んでみましたが、本当に文明が衝突していくのか、あるいは共生し共生していくのか。どちらかといえば、私は共生・共存のほうをとりたい。そのときに、ロータリーの存在、ロータリーの理念、そしてロータリーの奉仕というものが、大きな一つの力になっていくのではないかと考えてみると、新しい世紀のロータリーの発展によって必ずその存在がクローズアップしてくると考えられます。ですからこれからのロータリーの存在というもの、そして我々の奉仕活動のいかんによっては、新しい世紀が変わるのだと、そのくらいの信念を持ってまいりたいと思っております。

今日はこれから5時まで1時間半、大変長い時間でございますので、ただだらとして面白くない討論をしても、皆さん退屈されると思いますから、三つのセッションに分けようと思っております。

最初の30分は、ロータリーの奉仕とは何かということをお話ししたいと思います。それを理念的に理解して、それが過去、現在、未来へ、続いていくのだという一つの認識を持っていきたいのです。

次の30分は、ロータリーの奉仕の具体的な在り方を考えその中に、我々の奉仕活動の特徴を見出していききたいと思います。クラブの個性化、各クラブの事情もござい

ましよう。歴史も違うでしょう。しかし、その中で我々が取り上げていくプロジェクトをどう考えるべきかということをお話し合っていきたいと思っております。

最後の30分は、具体的にはどうするのだということをお話し合っていきたいと思っております。ですから、できるだけ皆さんのほうからも発言をしていただき、うちのクラブではこういうことをやっているとか、こういうことをしようと思っているが、どういうふうにしたらいだろうかということをお互いが話し合うことにより、大きな知識を得て新しいパワーを培っていただきたいと思っております。

今、お並びになる3人のパストガバナーは、新進気鋭のパストガバナーでありまして、生まれたてのほやほやの3人でございます。ガバナー時代には、こうしたい、ああしたいで、ただ流れていくということもありますが、パストガバナーになりますと、非常に客観的にものが見えてきます。ですから、そういった切実な自分の思いを、もう遠慮なしに言っていただくということをお願いをさせていただきます。そして、宮崎パストガバナーには、少しサイドから、アドバイザーとして適宜に発言をしていただくという構成でまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

それでは最初に、ロータリーの奉仕の考え方について、あるいはもっと融通をつけて、いろいろな自分の思いを



お話しになっても結構ですけども、土肥パストガバナーから話をいただきます。

土肥パネラー：

一番ほやほやの土肥でございます。よろしくお願いいたします。南園コーディネーターから、まず総論的

なことをしゃべりなさいといわれております。理論ですから、総論的なことが一番しゃべりやすく、先ほどの宮崎先生のような実践のお話はなかなか難しいと思っております。

今日は、南園先生がフロアの皆さま方からも意見をたくさんいただきたいというご意向でございますので、私は、まず皆さまに三つほど話題を提供させていただきたいと思っております。

最近、ロータリーが何かおかしいと言われております。ロータリーは衰退をやっていっているのではないかとことをよく聞きますが、これはまんざら杞憂ではないと思っております。ロータリーが何かおかしくなった、衰退してきた、この原因にはいろいろあると思っておりますが、新

しい21世紀のロータリーは、まずこの原因を探ることから始められなければいけないと私は考えます。

そこでまず最初に、ロータリーのモットーについて話をします。ロータリーのモットーは、皆さまよくご存知の通り、二つあります。第一はフランク・コリンズの「超我の奉仕」であります。第二は、フレデリック・シェルドンの「最もよく奉仕する者、最もよく報いられる」であります。

まず第一のモットーは差し置きまして、第二のシェルドンのモットーは、ひと口で言えば、職業奉仕のモットーでございます。またこれは、職業奉仕を基本理念にいたしまして、これの実践によって、ロータリアンが向上をしていこうというものであろうかと解釈しております。

また、第一のモットーであるフランク・コリンズの「超我の奉仕」は、人類愛に基づくボランティアの奉仕であり、いふならば、社会奉仕の理念に基づいたものであろうかと思っております。ロータリーの歴史は、この二つの異なる考え方が絶えず衝突をし、反発そして調和を目指しながら、今日に至っているものではなからうかと思っております。

ところで、本年6月、国際ロータリーの理事会は、この第二標語、シェルドンの職業奉仕のモットーの使用を中止すると決定いたしました。これが第一の、皆さまに対する話題の提供でございます。

第二の話題の提供は、ロータリーの綱領についてです。復習をするようにございますが、ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成することにあるとなっております。その補足説明として、四つの項目に分かれております。

この綱領を見ても明らかなように、ロータリーの目的あるいは根幹は職業奉仕であることは言うまでもございません。綱領の軽視は職業奉仕の軽視になり、現在のロータリー理念の空洞化を生んでいるのではないかと私は考えます。私たちロータリーに在籍するものは、自分の職業を人生のすべてとしてまったく考えないというわけにはいかないであります。

第三の話題提供でございますが、私はこのパネルディスカッションに出席させていただくために、2冊の本を読みました。一つは、1963年に国際ロータリーから出版された、「奉仕こそわがつとめ」という本です。あと一冊は、英国の作家チャールズ・ディケンズが1843年に書きました小説、「クリスマス・キャロル」です。

ご存じの方もおいでになるかと思いますが、「奉仕こそわがつとめ」という本は、職業奉仕のバイブルと今ま

で言われてきたものですが、この本の冒頭に、ロータリーの綱領が載っております。そして、次のページに、ディケンズのクリスマス・キャロルから引用されたと言われております、ジェイコブ・マーレイという登場人物の言葉が載っているのです。

人類が私の職業でした。慈善、恵み、寛容、そして博愛。すべて私の職業でした。商売上の取引などは、私の職業という広範な海洋中の一滴に過ぎないものであります。

こういう文章が、1963年に発行された、「奉仕こそわがつとめ」という本の冒頭に載っています。この文章は言うまでもなく、本年度のキング会長のR Iテーマ、『MANKIND IS OUR BUSINESS』の出典になったものです。原文はwasとなっておりますが、本年はisになっただけの違いです。

キング会長は、このディケンズがよほど好きなのでしょうが、昨年のアナハイムでも、私たちエレクトに、『MANKIND IS OUR BUSINESS』という演説をされました。本年度は、さらに進んで、このディケンズのクリスマス・キャロルの一節をR Iテーマとされております。

このテーマから私は、キング会長は、ロータリーの基本である職業奉仕、現在なおざりにされようとしている職業奉仕のことに焦点を当てられたのかと思っておりましたが、実は違いました。もっと深い意味からこのテーマを取り入れられたのであります。今回は、このディケンズのクリスマス・キャロルを読みまして、それが分かりました。

このクリスマス・キャロルが発表されました1843年の時代的背景は、産業革命が着々と進行して、能率の良い機械が取り入れられ、それまで人間の手でつくっていたものが、機械がつくるようになりました。その結果、人口の都市集中化がおこり、貧富の差、資本家と労働者、あるいは富める者と富まない者との差が非常に激しくなり、社会問題になってまいりました。

ディケンズも、貧しい一家に生まれたために、貧しい労働者に共感を持つようになって、富の支配階級の利己主義こそ、社会悪の主要な原因であるというような考えから小説を書いて、これが爆発的な人気を呼んだのであります。

つまり、ディケンズのクリスマス・キャロルという本は、思いやりをテーマにした本なのです。社会の不合理を正すのは、富める者、幸福な者、力がある者の任務であるという思想で書かれたのです。

キング会長は宗教家ですから、この作品を読まれて、ディケンズのテーマに共感をされたものと思われる。

そして、本年度のロータリーの奉仕活動全体の指針として、クリスマス・キャロルを利用されたのではないかと思います。これが第三の話題提供であります。この三つの事柄について、皆さまどのようにお考えでしょうか。活発なご意見を期待いたしております。これで終わります。

南園コーディネーター：

ありがとうございました。大変大事な問題を提起されていると思いますけれども、ディスカッションはあとにしまして、三人の意見をまず伺ってからにしようと思います。仁田バスター、お願いします。

仁田バスター：



今日のパネルディスカッションをこうして拝見いたしますと、私を除いて全部お医者さんで、会社経営者というのは私一人ですので、多少話が生々しくなるかと思いますが、ひとつご容赦いただきたい。

ロータリーの奉仕の原点は、ロータリークラブにあることは、申すまでもございません。そのことにつきましては、先ほど来、宮崎さんから非常に具体的に各クラブの奉仕活動等についてご紹介がありましたので、クラブのリーダーである皆さま方には、大変いいヒントと申しますか、参考になるお話だったと思います。

私は、多少視点を変えて話をしたいのです。まず、私が今日申し上げたいことの結論を先に申し上げておきます。ロータリーの理念、あるいは奉仕の理想というものは、あくまで理想でございまして、これを実践に移す場合には、手法というものが必要でございます。

理想は高ければ高いほどいいものでございますし、これを忘れてはならない。いわば不易流行の不易にあたるものでございますが、手法については、時代とともに変わるものではないかと思っております。したがって、理想を実践に移していくときには、しっかりと現実を見極めるところから始めるべきだと思います。

この春くらいから半年間、経営者の私の立場から見ますと、大変な変動の時代でございました。政治の面でも、霞ヶ関のスクランダルが次々に現れてまいりまして、1945年、敗戦以来日本の発展を支えてきた官僚たちの間にも、我々が信頼できないような事実が現れてきている。

それから、青少年犯罪の凶悪化。ことに子が親を殺し、親が子を殺す、あるいは刃物を持った人が小学校に理由なく乱入して子どもたちを殺傷するといったような、従来考えられなかったような事件も起きております。

また、バブル崩壊後10年になりますが、いろいろな財務上の悪化その他から大きな会社も小さな会社も同じような苦しい経営状態の中にあります。都市銀行という、絶対につぶれないと思ったような銀行が崩壊する。あるいは東京系、大阪系のまったく性質が異なるような銀行ですら合併をしなければならないような情勢でございます。

IT革命という名前を最近聞かなくなりましたが、この最も日本における先駆者だと思われておりました大手弱電メーカー、ソニー、日立、ナショナル、NEC、東芝、こういったところが、1万人単位のリストラを発表する。さらには、9月11日のニューヨークでのあいつたテロ事件でございます。私、社会人となって約50年、今ほど激動かつ将来に夢を描きにくい、将来の夢を語りにくいときはなかったと思います。

なぜこうなったのか。ロータリーは、こういったことを防げなかったのか。例えば青少年教育の問題等を論じるときに、私は口をつぐまざるを得ない気持ちなのです。なぜなら、彼らのいろいろな犯罪その他は、私たちがつくってきた社会の中で起きているのです。我々がやってきた結果が、こういう社会環境をつくり上げている。環境の問題でもそうです。我々が教育について語る資格はあるのかと自ら省みて、いささか忸怩たる思いがいたします。

しかし一方、我々が青少年問題を考えるときに、街の中でぞろぞろしている若い人たちを見て、今ごろの若い者はと言いますが、我々の時代では考えられなかったような、世界に出て伸び伸びと活躍している若い人たちが沢山おります。

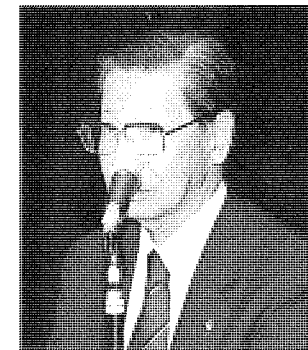
ときどきテレビでそういう人たちの紹介をされますが、新しい姿の若い人たちが出ているのだなあと。しかし、その人たちに、我々の考えでもって指導していいのだろうかという疑問がわいてまいります。

ロータリアンは、各職業のリーダー的立場の人がお揃いなのですから、いろいろな立場からそれを見て、こういった社会現象はいったいどこから来たのか、どうすれば良くなるのか、この議論が、まず各クラブの中から起こってこなければいけない。それを突き詰めた上で、自分のクラブの前に、自分に何がやれるのかということから始めなければならないと思います。最初の5分間、これだけにさせていただきます。

南園コーディネーター：

今のお二方とも、大変重要な問題を、しかも要領良くお話になっていただきました。それについてはのちほどまた論議をいたします。土屋バスター、ちょっとご意見を伺いたいと思います。

土屋バスター：



大変高邁なお話を伺ったわけですが、私は先ほどおっしゃったような、ロータリーの奉仕をどうとらえるかということではなくて、新しい世紀のロータリーをどうやっていくか、新しい世紀のロータリーの奉仕はどうかというのを考えてみたいと思います。

宮崎先生も、それから土屋バスターもいわれましたが、He profits most who serves bestというロータリーの標語が消えたようです。

実は、これをつくったフレデリック・アーサー・シェルドンが、1929年のあのウォール街の株の大暴落から世界の大恐慌に至った、そしてロータリーは会員の大減少を起した、その1930年に退会してしまったのです。ちょうど、日本の不況と、このHe profitsのモットーがなくなったのと、何か符合しているような気がしてならないのです。退会の理由にはいろいろあります。

それはともかくとして、この前の神戸の大震災のときには、たくさんボランティアが集まりました。また日本海で油が漂着したときにも、何万人というボランティアが来しました。そして今回の世界貿易センターのビルの爆破事件で、アメリカでも1万5,000人というボランティアが押し寄せたという話を聞いております。

プロフィットということについて、割合若い人たちが、あるいは世間の人たちがちょっと違った考えを持ってきたのではないかと。ボランティアが多いということは、何か世の中のためにしたい、何か人様のためにして、そして、難しく言えば自己実現といいますが、人生の生きがいというものをつかみたいと、そういう時代になってきているのではないかと気がしてならないのです。

そういう観点で見えていきますと、この21世紀の奉仕活動というのには、やはりキーワードとしてボランティアということが出てくるだろうと考えております。以上でございます。

南園コーディネーター：

ありがとうございました。先ほども申しましたように、大変重要なポイントをお話しいただいたと思います。最初に、土肥パストガバナーが提供された3つの話題は、ロータリーでは変えてはならない、一つの原点をお話しになっていただいたと思います。

ここに私は、「奉仕こそわがつとめ」という本を持ってきました。これが本当に読まれているかどうかということについても、今は多少古くなってはおりますけれども、原点として奉仕というものは何かということについて具体的にすべて書いてあります。

この本でいっている、ロータリーの奉仕というのは、他の人々と分かち合うのだということです。ロータリーの理想というのは分かち合いにあるのだという原点は原点として忘れてはならない。

人に対する思いやりというものは、結局、自分にそれが返ってくる。それがまた一つの大きな輪を広げていくのだという考え方で、私は大変大事だと思います。この中にディケンズの話も全部出てまいりますので、ぜひお読みになっていただきたいと思います。

そして、綱領も大変大事です。四つのテストも大事ですので、いろいろな意味で、今、土肥先生がおっしゃったような原点を我々ももう一度再考してみなければいけないのではないかと考えております。

そしていみじくも仁田パストガバナーは、この激動の世界で我々の現実の生活、社会の中で何が起っていて、それに対してどうするのかという議論が各クラブから出て、その前に自分で何ができるかということをいわれました。

そして、土屋パストガバナーは、もっと国際的な視野で、いろいろな意味でのいろいろなロータリーの奉仕の在り方というものを言うていただいたような気がします。三人のお話の中に、ロータリーの本質は含まれているというふうに感じながらお話を拝聴いたしました。

では、宮崎パストガバナーがどう思われたか、先ほどの講演を復習しながら、伺ってみましょう。

宮崎アドバイザー：

今、お三方のいろいろなお意見、お考えを承ることができました。私が今日お話ししたことについての、補足をさせていただいたような感じがいたします。

土肥パストガバナーには、職業奉仕そのものの考え方が、ロータリーの奉仕の原点であるということをお話して頂きました。何といたっても私達は職業人なのです。オリ



ました。

仁田パストガバナーがおっしゃいました、ロータリーの理念、理想、これは本当に、理念、理想です。私ちょっと感じたことがあるのですが、まるで、北極星のようなものであるなあと。方向は示してくれるけれども、実際に北極星そのものを手にとって見ることもできませんし、またそういう手法も、私たちは思いつかないのです。しかし、やはり北極星は光っているのです。ですから、私たちは、その方向に向かって少しでも努力をしていかなければいけないのではないかと思います。それで、理想は理想であって、そこへ到達することは非常に難しいと思います。

やはり私たちは、商売が成り立たなければ、ロータリアンとしてロータリークラブに在籍することもちょっと困難かと思えます。自分の職業というものを考えたときに、利潤というものをまず考えます。利潤を考えていかなないと、ロータリークラブを退会しなければいけなくなります。

ですから、利潤の求め方ですね。利潤を北極星に例えていただくと、その利潤の求め方に、配慮をしていかなければいけないのではないかとこのように思っています。まどろっこしいというふうにおっしゃるかもしれませんが、私たちは、利潤を真っ先に考えて、直接それにイージーな方法で到達する前に、ロータリアンとしてはどういうふうを考えなければいけないのかということに立脚した、いわゆる商売のやり方というものでしょうか、そういうものを考えていかなければいけないのではないかと感じました。

それから、土屋パストガバナーがおっしゃった、プロフィットという考え方です。最近ボランティアの方が非常に増えてきました。先ほど皆さんにお話ししたと思うのですが、私のところに重油が流れてきた話をしました。このときと同じだと思います。

ボランティアというのは、まず自分の心が満たされて、それが世の中のためになる、また、うれしいなという、そういうプロフィットがあると思います。そういうことを今考えながら、三人の話を伺いました。

ピックの代表選手ではないわけですが。自分の職業というものを一度振り返ってみて、ロータリーとして、ロータリアンとして当然考えていかなければならないことをいかに自分の生活の中に入れていくかという考え方が必要なのではないかと感じ

南園コーディネーター：

大変ありがとうございました。ロータリーの一つの基礎的な考え方、理念というようなものが、だんだん私は頭に浮かんできたような感じがいたします。皆さんも同じだろうと思うのです。

ではそのようなひとつの概念、あるいは考え方、そしてクラブの一番の基本的な在り方というものを基礎において、どのような奉仕活動をどのおうふう展開していくかという考え方に入っていきます。

例えば、四大奉仕というのがございますね。四大奉仕というのは、だいたい形としては、1927年ごろに、完成しているわけです。23-34のころは、まだそこまでいっていない。だから、23-34は、すべての奉仕に対する考え方と思われてもいいと思うのです。それから四大奉仕が出てきて、そして1978年の職業奉仕の宣言とか、あるいは92-285とか、いわゆる社会奉仕のいろいろな考え方が、だんだん時代とともに少しずつ変わって、加味されてきております。そういう時代的な変遷というものが頭に置きながら、四大奉仕というものを考えてみたいと思います。

もう一つの観点は、例えば社会奉仕、職業奉仕、あるいは国際奉仕といっても、今はもう、それが非常に流動化してきているという考え方が生まれてきています。例えば、ロータリーボランティアというのがあります。自分は医者ですから、医者でどこかへ行って、例えば東南アジアか、あるいはアフリカに行って、職業奉仕をすれば、これはロータリーボランティアですが、概念の中にはやはり、職業奉仕と、国際奉仕と、社会奉仕というものが組み合っているわけです。

WCSでもそうです。我々が、世界社会奉仕をするとしても、それは、ある意味で社会奉仕でもあるわけです。国際奉仕でもあるわけです。あるいは、もっと極端に言えば、あれはロータリアンとしてのクラブ奉仕であるかもしれないわけです。そういう融通性というものが、ボーダーレスな考え方というものが非常に出てきております。

それからもう一つ、私どもが考えておかなければならないのは、この四大奉仕に対して、ロータリー財団の関連性というものがぜひ理解してほしいと思います。財団はお金を出すだけではないのです。ロータリーの活動と、それを補完している融通無碍な、より大きな形で動いて活動しているというふうにお考えいただいて、例えば同額補助金なんかにはいたしましても、ロータリーの四大奉仕を補完する形で全部できているわけです。

そういうことをよくご理解の上で、お三人の方に、何か自分で、こういうことを四大奉仕の中から取り上げて言ってみたいとか、こうあるべきではないかということ、四、五分ずつお話ししていただきたいと思います。土肥パストガバナー、何かございますか。

土肥パネラー：

本日の、この壇上に上がっている方の職業分類は皆医師であるというふうに、仁田パストガバナーがおっしゃいました。皆さん、今月は職業奉仕月間で、ロータリーの友にチェスリー・ペリーのアイデアの誕生という記事が載っておりますが、これをお読みになりましたでしょうか。お読みになっていない方は、ぜひお読みになっていただきたいと思います。

チェスリー・ペリーは、ご承知のように、1911年から1942年まで、32年間国際ロータリーの事務総長をした方で、ビルダー・オブ・ロータリーといわれております。

このペリーさんが言っていることをひと言だけ申し上げますと、国際ロータリーが今まで最も貢献してきたことは、1929年にアメリカを襲った大恐慌のときに、ロータリーのメンバーの企業だけが倒産しなかったことと、その大恐慌を契機に、ロータリーは同業組合と商工会議所を非常にたくさんつくって、その同業組合と商工会議所にロータリーの理念を持ち込んだことである。これが、1930年から40年代にかけての、ロータリーが実業世界に貢献した第一の貢献であると、こういうふうに言っているのではありません。

それ以外にも言っておりますが、時間の関係で次に進めさせていただきたいと思います。また職業奉仕を論ずる上で、ハーバート・テイラーの四つのテストを皆さんおっしゃいます。しかし、この四つのテストを、我々実業人、あるいは専門職業に携わる者が守らなければいけないのはもちろんであります。なぜ四つのテストがこのように重要な意味を持っているのでございましょうか。それは、ハーバート・テイラーが非常に敬虔なクリスチャンで、彼の人生哲学が四つのテストの中に包み込まれているのではないかと、考えております。事実、彼が書いた、わが自叙伝という本には、四つのテストは、私が神に祈りを捧げながら考えたのであると、述べております。

四つのテストのことはさきおきまして、この自叙伝の最終章に、よき市民である10カ条ということが書かれております。これは取りも直さず、私たちロータリアンの身の置き方といいますか、身の律し方を、よき市民であるための10カ条に彼がまとめたのではないかと、考えております。つまり、職業人であるロータリアンが、これ

だけは守らなければいけない基準というものを教えてくれているのであります。

よい市民は、自分の住む社会ならびに世界の出来事に関して十分情報をつかんでいること。よい市民は、礼儀正しく親切で、自分勝手な行動を慎み、他人との折り合いもよく、よき隣人である。よい市民は、誠実で、皆から信頼され、自分の属する教会や宗教団体の活動に積極的に参加する。よい市民は、他人のしてくれたことに感謝し、自分の住む社会がより一層良くなるようにそれ相応の責任を負う。よい市民は、皆に公平で、国家社会の法に従い、選挙の際には棄権しない。全世界の人々の自由と幸福に強い関心を持って、自由と幸福を守るためにより相応の役割を果たす。有意義な仕事をして、同胞にとり役立つ人となる。よい市民は、自分の住む地域社会の青少年にとって模範となる人である。

この10項目をとって、いずれもロータリーの理念に反するものではないと考えております。

南園コーディネーター：

はい、ありがとうございます。それでは、仁田バスターガバナー、ひとつ何か奉仕活動の中で。

仁田バネラー：

ロータリーができたのは100年前アメリカにおいてでございます。それが今や全世界のロータリーになってきている。そこで私は、理念、理想は大切ですが、その読み方はもっと深くなればいけないのではないのかという気がしているのです。

例えば、寛容の精神、思いやりの精神。グローバルな立場からいきますと、世界にはキリスト教徒ばかりではございません。仏教徒もいれば、ユダヤ教徒もいるし、イスラム教徒だっているわけです。この人たちを、寛容の心でもって一つにつなぐことはできなかったのか。私はそこに、ひとつの無力感と同時に反省しなければならない点があるのではないかと。

それから、奉仕ということにつきましても、日本語にすれば思いやりということになるかと思えますけれども、だれかのために何かをしてさしあげるのが奉仕だと思っではないだろうか。例えば環境問題を取り上げた場合は、だれかのために何かをするのではなくて、自分のために、あるいは地球上の生命のために、自分がすることなのですね。そこを突っ込んで考えまないと、一人ひとりが限らない欲望を追求していく限り、世の中の効率主義は変わりません。

それから、例えば車を乗り回すとか、ゴルフをするとか、こういう欲求がどんどん増えていけば、自然は破壊されます。環境問題を言いながら、ゴルフ場がどんどん増えていくという現実はどうなのか。おそらく皆さんの頭の中では、別のものとして切り離されてはいないだろうか。

そういったことも含めて、私は今、ロータリーは転換期にあるという気がいたしております。具体的にどうするかというのは、またあとで。

南園コーディネーター：

はい、この次に。では土屋バスターガバナー、ご意見ございますか。



土屋バネラー：

コーディネーターのほうから、奉仕の種類とか、あるいはどのような奉仕に重点を置いていくべきかというようなお話がございました。いろいろな切り口があるので、まずコーディネーターは、経済的に、WCSとか、そういうものとの関連でこの奉仕というものを考えていくというふうな説明をされましたし、仁田バスターガバナーからは、考え方や思いやりといったことにおけるスタンドポイントの相違という切り口で、この奉仕を考えていくというお話がございました。

私は、まず第一に、少なくとも会員の連帯感とか、充実感とか、そういうものを満たすような奉仕であつたらいいなあと思えます。お付き合いとか、義理とか、委員長さんの顔立で奉仕というのが横行しておりますが、これは結局は、そのときはよいが、会員の意欲の低下につながっていくのではないかと、そういう危険をはらんでいられないかという危惧を持っております。

それから、その中で理解の不足というようなこともあると思えます。皆さん方の中に、皆さん方のお子さんの中に、ポリオの方がいらっしゃいますか。あるいは皆さ

ん方のご親戚の中にポリオの方がいらっしゃいますか。皆さん方のお隣にポリオの方が住んでいますか。この中で、そんなにたくさんいらっしゃらないと思います。

だけど、アメリカの社会では、全部がそうなのです。だから、ポリオさえやっておけば、世間にアピールできるのです。日本の国内の考え方と、世界の考え方とは、そのくらい遊離しております。それを理解しないと、会員の充足感とか、そういうものは盛り上がってこないと思うのです。

それを、皆さん方のようなリーダーが、まずアピールして下さる。皆さんが、会員の方が理解するように説明して下さる。それが非常に大事だと思います。他の諸国の方が、日本ではこういうことがあるということは理解しないかもしれない。また日本では、日本人の目からみたら、ポリオなんていうのはよそごとではないかというようになるかもしれない。ロータリーは、決議23-34の問題、その前から、ずっとポリオの問題をかかえております。身体障害者協会とか、訳してありますけれども、あれは全部ポリオなのです。だからロータリーはポリオを取り上げたのです。そのことは、日本では理解されていない。

そういう問題を、じゅうぶんに説明して、連帯感とか、充実感とか、そういうものをクラブの中で盛り上げる必要があるかと思えますし、そうでない、くだらないお付き合いの寄付などといったものは、避けたほうがいいのではないのでしょうか。

その次は、やはりロータリーは陰徳と申します。今、この両隣の方々が、職業奉仕ということを盛んに言われました。職業奉仕は陰徳なのです。あまり目立ちません。今は、目に見えるような奉仕をする時代なのです。

例えば、さきほど申しましたシェルドンが辞めたときに、なぜ辞めたか。それまでシェルドンは、I serveとかWe serveとかいう問題で、そういうような身体障害者協会、つまりポリオのアフター・・・をするような協会に、クラブとして入るといことは大反対だと。

ところが、会員が大減少して、大不況のさなかにあるときに、ポール・ハリスは賛成演説をしたのです。やはり、そういうときには目に見えるような奉仕をして、そして地域の信頼を勝ち得ないと、会員の増強も難しいし、クラブの運営も難しくなっていくと。そういうことがあります。

確かに職業奉仕、それから陰徳を積むことは大事だけれど、今は目に見えるような奉仕をやっていかなければクラブの存立が危なくなります。ロータリーの存立が危

なくなると私は考えます。

そして、これからのちにまた話しますけれども、平和の問題とか、地球環境の問題とか、ロータリーではどうにもならない問題があまりにも多過ぎます。高齢者問題でも、ただ老人ホームを訪問するというくらいの問題ではどうにもならない。

今は、三世老人社会をつくらうと、定年から10年間、そののちの10年間、それからの10年間、これにどう取り組むかということが、大問題なのです。これはやはり、企業の長である皆さん方が援助できる問題ではないかと考えます。

まだまだいろいろあります。青少年問題は、本当に衆人の注目するところ。商店街の落ち込みも注目するところ。商店街は生きるか死ぬかでやっています。やっているけれども、ロータリーではどうにもならない。せいぜいイベントをやっただけで応援するくらいだろうと思います。でも、やらないよりはましだろうと。

そういうようなことを、私は重点目標として考えております。

南園コーディネーター：

どうですか、皆さん。奉仕の考え方、皆さんの発言で何となく輪郭がお分かりになったらと思います。ロータリーの奉仕は、どちらかという、軽い、重い、こっちがいい、こっちが悪いということは言わないということになっておりまして、すべての奉仕活動はすべて大事なのです。それぞれのクラブの事情や、いろいろな考え方によって、それをどう選択し、それをどう組み合わせることでクラブ活動として展開していくかということが、皆さんの自主性なのです。

ロータリーはクラブが一番の基本だと、先ほどおっしゃったのは、ロータリー活動の基本はクラブの自主性にあるということを確認するところから始まっているわけです。23-34を読んでください。ちゃんと、自治権を尊重するという項目が出てきます。それが基本になっているということ、ひとつ頭にまず置いていただきたいと思います。

そして、例えばここにタバコの吸い殻が捨ててあるとしますね。どうしたらいいか。では、吸い殻を捨てるのか。それとも、吸い殻を捨てないように説得するのか。具体的に言うと、どちらが大事かという問題等々あります。私は両方とも大事だと思うのです。ただ説得だけで、タバコを捨つていなかったら、環境はまったく汚れてしまいますね。拾って説得するという、この両方ですね。

そういう考え方が、ロータリーの基本的な奉仕活動の中に、バランス良く展開されなければいけないと思っております。特に青少年の問題は、先ほど宮崎バスターがおっしゃいましたように、人を慈しみ、人を愛し、人を育てるといふ、この考え方の基本にロータリーの理念が一致しているのです。

だから、教育というものは大変大事だと。未来のためにも、新しい世紀のためにも、新しい世代の方々の息吹を、いい意味で育てていくということがいかに大事かということをお私最近痛感します。

もちろん、いろいろな意味で社会奉仕も国際奉仕も大事です。ただ特に、青少年に対する奉仕というものは、じゅうぶんに吟味して取り上げてほしいと思っております。宮崎バスターに、ちょっと青少年のところを。先ほどのお話の引き続きでも結構ですが。

宮崎アドバイザー：

今、コーディネーターから、青少年のことで少し何か言うことがないかというお話でございました。講演のとき、孫のことをお話ししましたけれども、私は先日小学校の運動会に行きました。そうしましたら、国旗掲揚というのがあります。生徒が並んでいて、こちら側に先生が並んでいて、PTAの方、両親、家族の方が並んでいて。

国旗のほうを向いて、君が代で国旗が揚がるのですが、今、小学校のお母さんというのは非常に若い年齢層なのです。私たちの年齢とはまったく違う。私たちにとっては孫ですから、違うのは当然ですけれども。そうしたら、国旗のほうを向いて、国旗の掲揚に合わせて見ている人というのは少ないですね。

何をしていたと思えますか。一生懸命子どもが見ているその姿を、みんなお母さんやお父さんは写真を撮っているのですよ。グラウンドの中へ出てでも、カメラアングルのいいところから写真を撮っているのです。

それから、こういう話があります。ある小学校のPTAのときに、学校の先生が、PTAのお父さんお母さん、何かおっしゃりたいことはありますか、ご意見ありますかと言いましたら、さっと一人のお母さんが手を挙げて、先生、お勉強は家でじゅうぶんばっちりやっていますから、しつこく教えてくださいと言ったのです。

お子さんと一緒にロータリアンが何かやるのもいいですけれども、やはりお父さんお母さんと一緒にその中へ入ってやっていただく、それがこれからは非常に大事なことになるのではないかというふうに感じました。

先ほど、確か土肥バスターがおっしゃったように、

アメリカで生まれたロータリーは、どうしてもクリスチャン的な考え方があるということですね。私たち日本人は、いわゆる一神教ではなく多神教なのです。一人の仏様や神様を拝むのではなく、私たちはいろいろな神様を拝んだり、いろいろなことをやっています。

だから、根本的に、そういう一人の神を敬うところから発生した文化と、私たちの、いわゆる地域から発生している文化とは、大きな違いがあるのです。ですから、我々が奉仕をするのにも、まったく教科書通りの奉仕の仕方をしますと、ややもすると空振りになることがあります。

ですから、今コーディネーターがおっしゃったように、クラブが単位であるので、クラブが地域社会を一番よく知っているわけですから、クラブの自主性、クラブに合った、地域のニーズに合った奉仕を、皆さんが考えてやっていただく。これがやはり、一番大事なことになるのではないかと思います。

南園コーディネーター：

わかりました。大変貴重なサジェスションを頂きました。だいたい、今までのところで、おおかたのロータリーの奉仕というものはこういうものかなあという考えが、おできになったと思しますので、あと30分はそれを実践の面で、あるいは新しい世代に、新しい世紀にどういうふうにしたいのだという皆さんの思いも込めて、ご意見を伺いたいと思っております。

何でも結構ですから、発言いただきたいと思っております。どうぞ、遠慮しないで。ご意見ございませんか。今まで一時間ずっと聞いてこられて。こういうことがあるかとか、こういうふうにしたいとか、あるいは疑問に思うこととか、ございませんか。何か思っていることはいっばいあると思うのですけれども。今日来ていらっしゃる方は、会長幹事さんでしょう。新しい年度の奉仕活動を、責任を持って展開されている方ですから、何か思いがあると思うのですが、バスター補佐の方、どうですか。

それでは、一応考えておいてください。

仁田パネラー：

よろしいですか。今、国旗のお話が出たので、お話ししたいのですが、ここにいらっしゃる皆さん方は、国民の祝祭日に全員国旗を掲げていらっしゃると思っておりますが、いかがですか。

南園コーディネーター：

いかがですか。国旗を掲げていらっしゃる方が多いようです。今の件で何かご意見ございませんか。

参加者：

私は、国旗を立ててもう40年近くになります。先ほどから国旗問題が出ておりますが、日本人に一番欠けているのが国旗に対して敬意を払わないことではないかと思っております。

国旗掲揚について世間でうんぬんされておりますが、このロータリーから国旗を掲揚するという決議をしていただきたいと思っております。

仁田パネラー：

それを申し上げましたのは、日本くらい、国旗を粗末にするという国民はないということを皆さんおっしゃいます。どこの国へ行っても、国旗を中心に気持ちは一つにまとまっているのですが、日本の最近の青少年にそういったような教育がなされていない。自分の国の国旗を粗末にするということは、外国へ行ってもその国の国旗に対して敬意を払わないということですから、国際人としては失格でございます。

と思ったら、ロータリアンたるべき者は、自ら国旗を掲げることから始めるべきではないだろうか。私のところも、敗戦後、国民の祝祭日には必ず国旗は掲げます。そうすると、私の前の家が掲げてくれるようになりました。ごくわずかですけれども、私はそういうふうには、ロータリーの奉仕の根本は個人にあるということが言いたかったので、ちょっとそれを付け加えさせていただきました。

南園コーディネーター：

日本のロータリーの国旗掲揚については、歴史的な経過がございまして、昔、戦争中には日本独特のロータリーもございましたし、大連ロータリークラブの綱領は素晴らしいものがございまして。ぜひご覧になっていただきたいと思っております。日本人が考えたロータリーの精神というものを、如実に表しているわけです。ですから、日本が戦後ロータリーに復帰するときに、いろいろな条件をつけられたり、それなりの歴史もあって今に至るわけです。

しかし、ロータリーは、個人個人の政治的な信条とか、愛国主義とかについてはまったくタッチしないという考え方をしておりますので、一人ひとりのロータリアンがロータリー活動をするのだという基本線から言えば、そ

の人が持っている愛国心を侵害することはまったくないわけなのです。

そういう意味でも、国旗を掲揚するということは、今の日本のロータリーとしては妥当ではないかという考えを持っています。何かご意見はございませんか。

土屋パネラー：

先ほどコーディネーターから、21世紀の奉仕を、どういう方法でやったらいいのかというお話がありましたが、ロータリーは、国の内外に大きなネットワークを持っていて、しかもそのネットワークのブランチは、みんな奉仕を考えている人たちです。そういうネットワークを利用した情報を集めなくて、何ぞロータリーかと言いたいわけなのです。

例えば、NHKはNHKの調査で判明したとか、毎日新聞の調査で判明したとか、そういうことを言います。ロータリーだって、たくさんのネットワークを持っていますから、そういう調査で、ロータリーが調査したところではこうであったと。地域の中であろうと、あるいは他の国の小さな問題であろうと、出してもいいのではないかというふうに考えます。

先ほど私は、ロータリーは、今世紀はボランティアの世紀であると申し上げました。現地の要請があれば、NGOを利用して、そしてNGOを支援して、それぞれの奉仕活動をやったらいいかと思っております。

また、ロータリーは、ニーズにかななかったことを、それぞれのクラブでやれと言いますが、果たしてどんな方法でニーズを汲み上げているか、そこが問題ではないかと思っております。ニーズの汲み上げ方が悪いから、奉仕活動がうまくいっていないのではないかという問題があります。

例えば、地域の問題でありましたら、奥様方をお願いして、町内会のあとで、ちょっとしたアンケートを取ってみるとか、あるいはアクトに出て行ってもらって調査してもらおうとか。あまり、時間と労力と金のかからないような方法で、ニーズを汲み上げるという方法もあるかと思っております。

ぜひそれをしていただきたい。その上で、ニーズがどうのこうのという議論になります。今のところは、だれれさんがどうのことだったからとか、ちょっとしたきっかけだけのニーズで物事が進行しているのではないかと。そこに欠陥があるというふうには私は思っております。

例えばNGOの連絡協議会、そういうものには、やはりだれれさんが積極的に関与して、ロータリーから人を出す

とか。そして、その中でNGOの動向をつかみ、NGOの中でこういうことをやりたい、ああいうことをやりたい、クラブのニーズにかなうものがあれば、それを支援していくと。そして、先ほどコーディネーターが言われましたように、WCSを与えるとか。

ロータリーは、国際ボランティアというシステムを持っています。これは、ロータリアンであろうとなかろうと、国際ボランティアにはくみあげていいわけですから、そういう人たちに支援していく。あるいはプロバスクラブを支援するというようなことで、国際奉仕もやったらいかがかと思います。

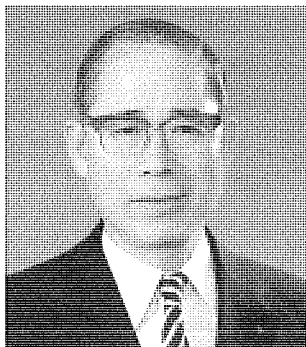
そしてそのときに、例えばNGOが他国に行けば、そのロータリークラブと、そのNGOとがタイアップしてやるというようにすれば、ロータリーの活動としてきちんとしたものになっていくだろうという印象を持っているわけでございます。また、RCCを、育てなければなりません。これが地域と一体化する一番の道だろうと思います。一番手近な道でありますから、RCCを何とかしてやろうではありませんか。先ほども申し上げましたけれども、寄付をするのだったらバザーをするとか、フリーマーケットをしてお金を集めて、それを寄付するというような形で、ただ、皆さま方のポケットマネーを出すというような寄付はなるべく避けたほうが、クラブのためにはなるのではないかと考えております。簡単ですが、以上で。

南園コーディネーター：

はい、どうぞ。あと20分ございますが、20分はやらないでください。五、六分くらいで。

松本：

二、三分でいい。あなた方は一生懸命やっているのだから、批判する必要もないのですが、さっきの標語のことをちょっと。



あれは、最近なくなっただけではない。前も、何回も、理事会ではなくしたのです。僕が理事のときも、1992年にも、第二標語というのはもうなくそうという理事会の決議が出ています。今までに何回も、理事会の決議は出ているのです。

出すと、すぐまた日本のガバナー、パストガバナーが、絶対にあれは入れようと。決議23-34と同じように、日本からすぐ出るのです。それで、手続要覧に書いておいたらいいのではないかというので書いたりするから、またこのたびも言っているのですけれども、これは、相当前からなしにしているのです。例えば、今日の宮崎さんのお話でも、あそこにHe profitsが出てこなくても、service above selfでも話が済むわけです。

もともとは、皆さんご案内のように、serviceを奉仕と訳しているところに問題があるのです。シェルドンの第二標語を見ると、シェルドンは、職業を勉強することは、サービスを勉強することだと、しょっぱなに言っているのです。そこを取っているわけですね、みんな言う場合に。シェルドンの職業奉仕のしょっぱなを英語で読んでみても、職業とは、サービスを研究することだと書いているわけです。

だからそれを、サービスという言葉で奉仕にするから、何か日本では、奉仕というただでやるような感じになるけれども、原本は、職業を勉強することはサービスを勉強することだという。サービスという言葉は非常に難しいから、やはりプロフィットがどのくらいあるかないかという議論にもなるわけですが。

それと、He profits most who serves bestと、Heが男だから、最近いろいろな問題があります。Heではいけないとか、いろいろあるのですけれども、それはそれで。RIのほうは、第二標語は、service above selfで間に合うという考えなのです。まあ、そんなことで。皆さん熱心にやっておられるから。

それから、もう一つあります。奉仕の四カ条。これも、今までに、青少年奉仕を入れて、あれを六カ条にしようとか何とか。昔は、objects of rotaryだから複数になっていましたよね。ロータリーの綱領というのは、objects of rotary。だから、四つが六つになったり。1953年から、今のobject of rotary。単数になったわけですね。

だから、憲法ではないが、前文は意味があるので、あとの四カ条は便宜上になっているのだと。だから、クラブで六カ条にしてもいいし、七カ条にしてもいいし。現実には、委員会を今つくっていますよね。だから青少年奉仕を必ずしも五大奉仕にしなくてもいいというか、そういうことに。これも、規定審議会で何回も出ました。だから、今はもうobject of rotaryと。基本ですよ。あとは、各クラブの自主性で委員会をつくってくださいと、こういうことです。このへんでやめます。各項目の批判もやめて。失礼しました。

南園コーディネーター：

ありがとうございました。言えば何時間もかかりそうです。でも、本当に貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。He profits most who serves bestというの、昔の原文を読むと、We profitと、Weが入っている時期があるのですよね。Weならば、両性と考えてもいいかなあという気もしますけれども。今の現状を申し上げますと、板橋現理事は、そのへんを大変心配されて、一応いろいろなパストガバナーのご意見もお聞きになっております。

佐藤：

下関西クラブの佐藤と申します。今ここで、いろいろなお話ができましたが、実践をやるためには確かに理論的な武装というものは必要だろうと思いますけれども、先ほど仁田ガバナーが言われたことに、私は本当に共感いたします。理想は高くてもいい。だけど実際にやっていくのは、もっと具体的に、社会的な情勢をよく判断しながら、実践していくという、これが、現代のロータリーではないかと思うのです。

私のクラブにRCCというのがございまして、いわゆるボランティア団体の方たちといろいろな話をするわけです。その方たちのお話を聞きますと、例えば役所に勤めていたとか、あるいは病院に勤めていたとかいうような形で、平日頃からずっと、ボランティアということについて非常に努力している方たちなのです。だから、ボランティアをやることに対してひとつも苦になっていないのですね。

ところが、ロータリーの人たちというのは、自分の仕事というものを持っているのですよ。それをボランティアと一緒に、先ほど言われましたように、例えばお金を寄付するときは何かやってくれとか、フリーマーケットをやってくれとか、なかなかそんな時間というのはみんな取れないのですよ。

だからもう少し、クラブの現状ということをしかり把握していただいたらどうだろうかと思っております。何か大変批判的なことを言って申し訳ございませんけれども、私はそういうふうには思っております。

南園コーディネーター：

結構です。先ほどの話の中には、いろいろな問題が含まれておまして、他の奉仕団体とロータリーとの関連というの、これはそれなりのまた一つの理論もござい

ますし、歴史もございまして、ひとつ手続要覧等をお読みになって勉強していただきたいと思っております。

それから、奉仕活動の方法についても、ロータリーとして品位を落とすような、例えばいろいろなことで金を得てはならないとか、いろいろなことが従来から言われておりますので、十分お考えの上で、方法を決めていただいたらと思っております。

時間があと10分になりましたけれども、実は私は、このセッションで討議していただきたいことが一つありました。それは、クラブが原点であるということは先ほどわかりましたけれども、本当に実りのあるプロジェクトをするにはどうするかということ、具体的にみんなで論議したかったのですが、もう時間がなくなりました。

項目だけ、私の考えを言っておきます。先ほど話が出ました、地域社会や国際社会でのニーズというものを、どういうふう到我々がそれを取り上げて、何が我々のクラブに適したニーズなのかということの認識をきちんと持ってもらう。

この検討が、なかなかなされていない点があるのではないかと思うのです。型通りになってしまう。前の会長がやったから、それを引き継ぎやろうと、検討もなしにやってしまう。そういうことがあると、まったくプロジェクトという活動が生かされていないということになります。それからやはり、もしやるのだったら、はっきりした目標と、達成できる一つの行動範囲というものをきちんと決めてほしいということですね。ですから、実際的な管理可能な方法を考えてほしいということです。

これは、例えば同額補助金を財団に申請します。申請書の内容というものがあり、私も今年エバンストンに行って、財団の方からいろいろな話も聞いたのですが、3分の1以上は不備なのです。要するに目的とか、方法とか、あるいは誰が責任を持つのかというところの項目がなされないままに送ってくるので認定しようがないというケースが3分の1くらいあります。

そういうのは、今度は全部お返ししそれでビジネスサイクルというものを決めて、そして5月から6、7に、我々でもう一度考え直す期間をつくろうというふうに、今日にちが設定されてきております。

ですから、実際に管理可能な計画を立て予算というのがしっかりとなされていなければいけないわけです。そういうものがないと、例えば同額補助金でも、申請されても認めてくれません。

それから、どういう人たちが、どういふふう動いて、どうするのだという資源があるかないかですね。人的資源、

物的資源、時間的資源、いろいろなものがありますけれども、そういう資源をどう考えて、プロジェクトにそれをはめ込んでいくか。そして実施計画や団体との協調条件などをしっかりと考えた上で、実際問題としてのプロジェクトを、皆さんで考えていただきたい。

そして、一番基本になるのは積極的な推進活動です。熱意です。熱意がなかったら何もできません、まずみんなと一緒にやろうということ、この一緒にやろうということが、またロータリーの良さでございまして、参加するということが多かったらだめなのだとということもご認識いただきたいと思います。

お金を出すだけではだめなのです。木を植えるだけではだめなのです。みんなで行って、木を植えながら語り合わなければだめなのです。子どもたちを連れて行って、子どもたちと話し合う。そこに、人と触れ合う、人を育てる、我々も育てられる、そういうロータリーの本質が生まれてくるのではないかとことです。参加をしてください、自分たちで汗を流してくださいというのが、ロータリーのこういうプロジェクトの一番の根本だと私は思っておりますので、そういうことをしっかりとお考えになって、プロジェクトをいろいろと具体的に考えて下さい。

またいつかの機会に、今度は具体例をあげてガバナーがそういうことを話し合うチャンスをつくっていただければと思います。先ほど、宮崎バスターガバナーがおっしゃった具体例に私は大変感銘を受けました。だって実践しているから、体験しているから感銘を受けるのであって、そういうふうなものを、また話し合えれば良いと思っております。

赤阪：

私、福山赤坂ロータリークラブの赤阪と言いますが、先ほど仁田バスターガバナーも問題提起をされましたし、宮崎バスターガバナーも運動会に行ったときの若いお母さんの例を挙げられました。つまり日本の将来を担う子どもたち、私もその教育に携わる者として…。いろいろ先ほど深刻な日本の青少年の問題を提起されました。

福山でも、福山地区青少年育成協議会というものが9月に発足しました。それは、青少年の問題、ひいては今の若いお母さん、保護者たちをどういうふうな教育し、またどういうことを我々がしたらいいかということ、もちろん各クラブでも考えるし、それが今、ロータリーの緊急な問題ではないかという認識に立って、いろいろしているわけです。

そういう点で、何か話していただけることがあれば聞きたいと思えますし、また他のクラブの方々の中でも、クラブで何かそういうプロジェクトがあれば、ぜひ聞かせてもらいたいと思ってまいりましたので、よろしく願います。

土肥パネラー：

今のご発言に対して、子どもは親の背中を見て育つといわれておりますが、ロータリアンの皆さまは、自分の子どもさんに恥じないような職業人の職業生活をなさっておいでになりますでしょうか。

私は、商工会議所と同業組合をロータリーはもう少し大切にしなければいけないと思っております。現に私たちの団体の日本医師会の主張は、ロータリーの考え方とはかなりかけ離れた主張をしていると思っております。やはり、商工会議所とロータリーが合体とまではいかないにしても、仲良くするということが、これからのロータリーの将来に必要なことではないかと思えます。

それから、もう一つだけ、申し上げたいのですけれども、もうこのへんで、日本ロータリー、日本独自のロータリーというものを、具体的にどうすればいいか考えてもいい時期、時代ではないだろうかと思えます。アメリカ一辺倒の管理体制がいいか悪いかは別といたしましても日本独自のロータリーというものを、ロータリアンは真剣に考えてもよろしいのではないかと思っております。

南園コーディネーター：

はい、ありがとうございました。では仁田バスターガバナー。

仁田パネラー：

青少年問題、特に3歳から5歳の幼児教育が最も大切だということを、私はガバナーをやっております一年間、ずっと言い続けてまいりました。これを詳しく述べている時間はございませんので、具体的に一つご提案をしたのですが。

クラブ活動の中で、青少年教育をどうするかというのは、皆さんお考えください。しかし基本は、もっと子どもたちを自然の中へ放り出すということが必要なのではないかと思えます。それは、つくられた自然とか、ふれあい広場へ連れて行って、すべり台にのせることではない。私たちは子供のときに、何が一番、人間としての教育を受けたかと言われると、自然そのものだったような気がするのです。それが失われている。これが一つです。

それから、もう一つの提言は、これは私、お話ししようかどうか、自分自身大変苦しいのです。私が公式訪問をしたときにお伺いした話なのですが、毎朝家の前を掃除しそのときに子どもが通ったら、おはようと声をかけたとおっしゃるのですね。三日、四日はきょとんとしていたのだけれども、そのうちにおはようと返してくれるようになったというのです。

私はそれをやろうと思ひまして、明日からと思ったら、たまたまその日はだれも通らなかつた。そういうことが二、三日続きますと、そのうち気持ちがなえてしまうのですが、これはやりたいのです。皆さんもどうでしょうか。家の前を通る近所の子どもにおはよと言うのを、みんなが一斉に始めるというのが、一番私は具体的で奉仕の基本とでもいえることではないかという気がいたします。

南園コーディネーター：

ありがとうございました。もうロータリアンの基本ですね。

土屋パネラー：

先ほどの下関西クラブからのお話で、ちょっと冤罪を弁明しなければなりません。ロータリークラブのほうで、いろいろな売るもの、不用品を集めて、そしてアクトとかRCCでバザーを開いてもらえばいいわけで、ロータリークラブの会員がわざわざバザーを開くという必要はないと思っております。そうすれば具体的にできるのではないのでしょうか。

南園コーディネーター：

本当に皆さん、長時間ありがとうございました。何か得るものを持ってお帰りいただけると幸いです。本当にありがとうございました。

司会：

過去、現在、未来のロータリーの奉仕活動とは何か、具体的にどうすればよいか、熱意を持ってやっていただきたいという、活発なご議論をしていただきました。コーディネーター、アドバイザー、パネラーの皆さま、ありがとうございました。